

近藤和彦著

『イギリス史10講』

(岩波新書 1464)

岩波書店 二〇一三・一二刊

B 40 三一八頁 九〇〇円

本書は、著者にとって『民のモラル』（一九九三年）、『文明の表象 英国』（一九九八年）に続く三冊目の単著である。『ドイツ史10講』（二〇〇三年）、『フランス史10講』（二〇〇六年）の続刊だが、両書の執筆者とは違う世代に属して異なる歴史感覚を持つ著者は、本書を「今日の研究蓄積を反映して、種もしかけもある本」（五頁）だという。

全体の七割が一六世紀以降に割かれているのは、それがシリーズの約束だからである。グローバル化の契機としての一六世紀と一八〇〇年前後が重視されるが、バランスの取れた時代順の記述のなかに、映画や文学作品に題材を取ったテーマ的記述が効果的に配置され、「スタンダードな叙述と知的なおもしろさ」（三〇六頁）を結びつける試みが随所にみられる。先史時代から現代までのイギリスの歴史のなかで、アイデンティティや秩序のありかた、世界史や日本史との関連に幾度も言及していること、さらには近世という時代区分の採用も、本書の特徴、新しさといえよう。だが著者の意図するのは最新の研究の単なる紹介ではない。それは、通史を書くことで、イギリス史上に「過去と現在のパートナーシ

ップ」が果たしてきた役割を際立たせ、「長い歴史を通じて構築され修正されてきた進捗棒／発想の枠組み」（三〇二頁）を保持することの重要性を、現代日本の読者に示していくことである。

こうした目的のもとに、本書はブリテン諸島にとって外との関係がいかに重要であったかを、様々な角度から明らかにした。著者は、この問題を「ヨーロッパか、帝国か」には落とし込まず、外から来るものへの抵抗と受容、出て行った先での摩擦と収獲の繰り返しという観点から、長期的な歴史過程のなかにおき、さらに他者との競合、共存、学びあいこそが「イギリス史のパターン」（一六頁）だとして、その異種混交的でコスモポリタンな社会に期待を込める。イギリス人は「将来にわたって、連邦制、複合性、多様性を守り続けるだろう」（九一―一〇頁）という見通しには、著者の立ち位置が明示されている。

本書全体を貫くキーコンセプトは、公あるいは公共である。公をめぐる問題は、「王国の共同体」、「コモンウェルス／コモンウィール」のありかたとして、また「共同の福利」、「公共財」、「古来の国制」、「公益団体」、さらには「社会主義共同体」、「新自由主義」をめぐる話題として、全編に登場する。思想（家）の系譜としては、フォーテスキューやホブズから啓蒙思想家を経てベンサムイットに、さらには社会主義者から新自由主義者、そして社会民主主義者へと連なる。これらの公を支える概念や制度的枠組みの変遷と呼応するように、各時代の与件の下で共同の福利や公共善の増大を目指して生きた責任感あるエリートと知識人の群像、その知的で実践的な営みを追いかける試みが、本書全体を貫く線となつ

ている。それは、ジェントルマンから豹変したステイツマン（二〇六頁）へのまなざしや、『過去と現在のパートナーシップ』によって『生まれながらの統治者』と仕事人／実務家の同窓会人脈（二二六頁）が誕生したことへの評価にも反映されている。こうした姿勢は、この本が重要な読者として現代日本の読書人（知識人）を念頭においていることと関係しているのだろう。

本書の背骨は、現代日本の知識人に対する著者からの渾身の問いかけと対話の試みである。しかしこの本には、一部の知的エリートしか相手にしていない、という風に受け止められないための工夫（種としかけ）が様々に施されている。前衛が大衆を導くといった方針や、知識人が民衆と同じ地平に立つといった幻想にもとづく行動様式に流れ込むのを慎重に避けているのである。選別や排除による純化ではなく、複合や包含を旨とする社会をめざすならば、知識人以外の雑多で多様な読者にも同じく真摯な姿勢で対面し、語りかけなければならないのだ。その上でなお、民衆や労働者よりも、公共性と共に、複合性、多様性、コスモポリタンといったチームに、そしてステイツマンの責任感に期待を込める本書は、前著『文明の表象 英国』と連続していると受け取れることも出来る。違いをあえて指摘するなら、革命家とは別のところにいるリーダーたちにも率直に語りかけるのを、著者はもはや躊躇わなくなったと見える点だろうか。

そして、本書はイギリスという「政治社会」の歴史だという点を見過ごしてはならない。著者は政治社会という枠組みをもちいることで、国民国家に必然的に流れ込む道程とは違うところにイ

ギリスの歴史を描いた。一国史を離れ、自然地理的な枠や地政学的な単位でもない政治社会を使うことで、一定のアイデンティティと秩序を持つ社会集団の過去と現在をダイナミックに捉え、叙述する可能性がそこにある。政治社会と社会経済を総合的に叙述する方法の追究など、取り組むべき点は残る。ただそれは、読者がそれぞれに引き継ぎ、考えていくべき部分である。

（坂下 史）